

宇田川家は玄随げんずいの代から西洋内科を専門にしていますが、内科の治療には薬が欠かせません。今回は、玄真が刊行した薬学書『和蘭薬鏡』と『遠西医方名物考』を紹介しましょう。

玄随が『西説内科撰要』で初めて日本に西洋内科を紹介してから、次第に内科を専門とする医師が誕生してきました。しかし、治療に使う西洋の薬の知識が乏しく、思うように治療できない医師たちはもどかしく感じていたといえます。もちろん玄随も薬学の必要性に気付いて研究を始めていましたが、志半ばで亡くなってしまいました。その遺志を継いだのが玄真でした。

玄真は博物学や薬学の本二十数冊を翻訳すると、西洋の薬を日本や中国にある薬と照合していきましました。その内容をまとめた稿本は数十冊に達したといえます。玄真の養子となった榕菴ようあんがそれに校訂を加え、文政3年（1820）、初めて本格的に西洋の薬物を紹介した『和蘭薬鏡』（3巻）を刊行しました。

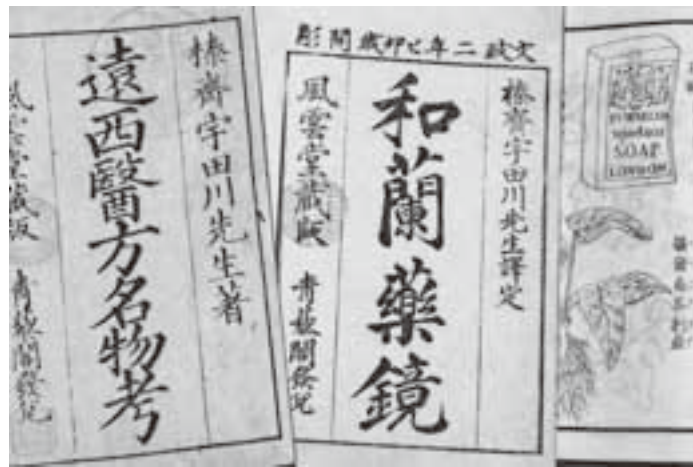
次いで2年後に刊行した『遠西医方名物考』は全部で36巻もありましたが、文政8年（1825）までのわずか3年間ですべてが刊行されています。この書には西洋の薬物が名前のイロハ順に記載され、産地や形、作り方、薬効、用い方がまとめられていました。日本にない薬は性質を調べ、代用できるものがあれば挙げています。そのため、西洋の薬学を集大成した書として広く普及しました。書の冒頭には「舶来の薬品は手に入れにくいとその効果が明らかになり、人々が求めるようになるれば、必ず身近な薬となるだろう」とあります。

## 筆 漫 覧 博 学 洋

～『和蘭薬鏡』と『遠西医方名物考』～

その言葉どおりに広まっていった薬も少なくなかったことでしょう。

天保5年（1834）からは、榕菴が中心となって同書の補巻『遠西医方名物考補遺』（9巻）を刊行します。この補巻には「元素編」があり、窒素や酸素、炭酸についても紹介されました。こうした化学や薬の原料となる植物の研究は、榕菴によって更に深められていくことになるのです。



▲『遠西医方名物考』と『和蘭薬鏡』

※透かしの家紋は右が箕作家、左が宇田川家のもの

### 11月中のひとの動き

人口	109,803人	(前月比△34)
男	52,370人	(同△7)
女	57,433人	(同△27)
世帯	43,876世帯	(同△11)
転入	206人	転出 212人
出生	81人	死亡 109人

(12月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



### つぶやき 編集室

とかく気になるメタボリックシンドローム。忘年会、おせち、新年会...どこまで誘惑が続くのでしょうか。メタボ対策として始めたハットの素振りも、いつまで続くことやら。やはり空振りに終わるのでしようか? (213)

明けましておめでとうございます。広報担当となり迎える2回目のお正月。長い休みをゆっくり過ごすことができました。と思うもつかの間、来月2月号は市制施行80周年記念の特別号。これからバタバタになりますね。(8)

初めて新春座談会の編集を担当しました。限られた文字数の中、文章で伝える難しさを改めて実感しました。語られた熱い思いやその人独自の視点などが読者の皆さんに伝わったでしょうか? ご感想をお待ちしています。(2)



編集・発行 (毎月10日発行)  
津山市総合企画部市長公室 (市役所3階)  
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地  
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152  
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。  
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

